

氏名	勝田 光		
学位の種類	博士（教育学）		
学位記番号	博甲第	7800	号
学位授与年月	平成 28年 3月 25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	中学生の書く行為に着目した国語科における読者反応の支援		
主査	筑波大学教授	博士（教育学）	塚田 泰彦
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	甲斐 雄一郎
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	片平 克弘
副査	筑波大学教授	教育学博士	櫻井 茂男

論文の内容の要旨

（目的）

本研究は、米国を中心に展開し日本でも新たな研究領域として定着した「読者反応研究」の成果を踏まえて、読むことの学習指導の最新の研究課題を追究し、実践と研究の両面で新たな教育的知見を得ることを目的としている。とくに、中学校段階での書く行為に着目して国語科における読者反応の支援のあり方を追究することが独自の目的となっている。この目的は、これまでの内外の研究成果をふまえて二つの実践的課題に答えようとするもので、一つは「教師の役割を中心とした教室の読書の支援のあり方」、もう一つは「指導過程に創作的な文章を書く活動を位置づけることの効果」である。

（対象と方法）

研究対象としては、中学生の読者反応の過程に中心を置き、複数の授業過程について実証的なデータを収集し、これを所期の目的に照らして分析することで、教育的効果について知見を得ようとするものである。分析のための枠組みとしては、読者反応理論のうち、読みの意味形成過程での読者と文章の役割の双方を視野に入れたもの（Iser, 1978/2005 や Rosenblatt, 1978）に依拠するとともに、これらの理論で不十分な面を、Ruddell & Unrau (2004) の読書モデルで補完している。教室で学習者が読む文章を印刷された文章に限定せず、その学習者がそれ以前に読んできた文章や教師から与えられた課題なども分析対象とし、より多様な要素を取り入れた教室の読書モデルを提示している。

この構築された独自の読書モデルに依拠して、本研究では五つの調査課題が抽出されている。1) 教室の読書における支援のあり方を明らかにするために、どのような観点から教室の読書を観察すればいいか、2) 学習者の読者反応を支援する教師の役割はどのようなものか、3) 読み書きが苦手な学習者

が意味交渉を生かして、新たな文章を書く過程をどう支援すればいいか、4) 物語創作課題は、学習者の読みを豊かにする効果があるか、5) 学習者が物語を創作した後、文学的文章を読む授業は成立するか、である。この調査課題 1～3 は研究課題の一つである「教師の役割を中心とした教室の読書の支援のあり方」を追究するためのものであり、調査課題 4～5 はもう一つの研究課題「指導過程に創作的な文章を書く活動を位置づけることの効果」を明らかにするためのものである

これら五つの調査はそれぞれの調査デザインと分析方法を目的に沿って適宜変更しており、複数の対象と方法を組み合わせながら、話し言葉と書き言葉のデータを質的分析と量的分析双方から適切に処理している。

(結果)

五つの調査結果の概要は、次のとおりである。1) 教師の役割の重要性が確認されるとともに、意味交渉された内容と感想文の関係を分析した結果、意味交渉された内容を生かして新たな文章を書くことの難しさが示唆された。2) 学習者の読者反応を支援する教師の役割が五つ抽出された。3) 読み書きが苦手な学習者でも適切な支援があれば独自に意味形成を行えることが示され、そのための支援について三つのカテゴリー全 13 種の支援内容が明らかにされた。4) 学習者の記述量の分析の結果、物語創作課題が学習者の読みを豊かにする効果があることが明らかになった。5) 学習者が物語を創作した後、文学的文章を読む授業では創作にかかわる自主的な読み書きが生起することが確認された。

(考察)

中学校段階での読みの学習指導においては、読者反応理論に依拠した研究の蓄積が行われてきたが、読者の意味形成過程それ自体の記述研究に終始する面があり、読むことの指導過程での教師の役割については不十分であった。この点で、本研究では読み書きの苦手な学習者においても教師の支援という役割が重要であることと、具体的にどのような支援があり得るかについて独自に分類し、新たな読者反応の様相が実証的に記述されたことで指導上の貴重な示唆が得られた。また読み書き相互の学習過程についても先導的な研究成果がもたらされ、とくに物語創作課題の読書への有意な関与性について本研究は独自の知見を提示した。

審査の結果の要旨

(批評)

理論的な研究の水準については国際的なレビューを適切かつ精細に行って研究課題を明示している。研究方法についてもこれまでの到達点を確認した上で、新たに独自の手法を取り入れた調査研究を企画し、データの正確な処理を行って独創的な知見を得ている。具体的な研究成果としては、国際的にも研究の蓄積が乏しい、「読者反応」に関わる教師の指導上の支援の実態を把握することで授業の根幹にかかわる独創的な改善の提案を行っている。その成果は今後の教育研究に多くの示唆を与えるものである。以上のことから、本研究は博士学位論文として高く評価できると判断した。

平成 28 年 2 月 3 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。